ある夏の日に・ローマ編

一級狙撃手

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある事件からローマに行く事となった上条当麻。

彼は戦いの中で仲間との信頼を高めていく。

【ある夏の日に】が始まる前の話。ひたすら戦闘。ラブコメ要素はほとんどないかも。

アリサは関係なし!?

【ある夏の日に】の方も閲覧どうぞ。

ＵＲＬ【ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／７９３８３／】

目　次

第一章　一話【ローマにて】―　1
きっかけ――――――――――――――――　4

第一章　一話【ローマにて】

ある夏の日に・番外編

時は2月、本編が始まる5ヶ月前。
場所はローマ。状況は戦闘中。
相手はローマ正教の末端構成員の武装集団数百人と数十人の魔術師、あとは一般的に言うテロリスト計百人弱の総勢約五百人を相手にこちらの戦力は、学園都市のＬＶＥＬ５四人にＬＶＥＬ４が一人、ＬＶＥＬ３が一人にＬＶＥＬ０が三人、イギリス清教の魔術師が二人、天草式十字凄教が十数人、無所属の魔術師が一人の計二十人強と、シャットアウラ達黒鴉部隊、妹達（シスターズ）、ローマ正教の魔術師が十数人で迎え撃つ。（ちなみに、ローマ正教の魔術師と妹達は戦闘場所が違う）
今は、隊を二つに分けて戦っている。ステイル、姫乃を除く魔術師組とその他学園都市＆ステイル、姫乃組である。総指揮はなぜかこの俺…上条当麻がとっている。
この戦闘は、魔術師の戦闘であるため、他の人を近づける訳にはいかない。かと言って、人払いのルーンなど刻む暇もなければ、カードは戦闘で使うため数を避けない。

その為、妹達で人の侵入を阻止（その前に食峰のメンタルアウトで、警察の上層部を操り、避難命令を出させている。なので妹達が相手しているのは野次馬）、その間に敵を倒す。と言うのが今回の作戦だった。（上空に関してはローマ正教の魔術師達が結界をはって隠している）

主な戦い方は、まず、紅の能力、【物体反射《テレポートミラー》】を応用して、鏡を砕き、超細かい砂状にしたものをテレポートさせて、対象（鏡）を地面に対して固定させるのではなく、人に対して固定させて動きに対応し、敵の射撃から全員を守る。

その上で一方通行は左から、俺が右から突っ込み（俺は姫乃に教わった魔術、【Ｅｘａｃｅｒｂａｔｅ（姫乃が考えた魔術の為、ラテン語ではなく英語。意味はそのまま）】を発動、【幻想殺し《イマジンブレイカー》】を全身に移してから）、真ん中は天草式十字凄教と麦野沈利、電波関係は美琴の強力な電磁波で通信不能に、残りのメンツは残党狩りと敵の別動隊の相手をしている。（別動隊の数は三。上で出てきた人数には、別動隊は含まれていない。上の数はあくまで上条たちが戦っている人数）

浜面は敵に関する正確な情報をいち早く提供してくれたし、全部隊（上条隊、天草式隊、黒鴉部隊、妹達隊、ローマ正教隊）の情報を統制、俺に簡潔に伝え、俺からの指示も浜面を通して全部隊に伝えられる。（電波は美琴の電気のせいで使えないため、魔術通信をおこなっている）

最優先目標は敵魔術師。（理由は通信をきるため）

ここまで、なんとか切り抜けて来た。こっちに着いたのが午後十時、そのままぶっ通しで戦闘をして、今は朝四時、実に六時間にも及ぶ一進一退の攻防が続いていた。だが、こちらにはタイムリミットがある。今日の八時にはこちらのＬＶＥＬ５の三人は定期健診で一度帰らないといけないのだ。

その後、帰ってくるまでは、攻撃は断念しなくてはならない。

そもそも、何故こんな事になったのか。それはローマ正教内部の分裂がきっかけだった。

上層部に不満をもった末端構成員が武装、ローマ教皇を殺害しようとする。これだけだったら学園都市が割ってはいる必要性がない。そう、そもそもなんで学園都市が巻き込まれたのか。

その原因は、今から約二週間前に遡る。

きっかけ

時を遡って、場所はローマ。
そこに、一人の少年が居た。
少年は学校に行くのが嫌いだった。

正確に言えば、物事を数値化されて比べられるのが嫌いだった。
そんな彼は、ＬＥＶＥＬ３の能力者で、先生や他の関係者からは、ＬＥＶＥＬ４クラスの力はあるから、次回のテストでそうしよう、と言われていた。
勿論、数値化されるのは嫌いだが、上がること自体は嫌じゃない。
だから、友達が祝いとしてローマに旅行してくるように言ってくれたのだった。
何故ローマなのかは知らないけど、でも恐らく俺が行きたいと言っていたからだろう。
そんな訳で、俺は現在ローマに一週間滞在中なのであった。

事は、滞在四日目に起こった。
ホームステイさせて頂いていた俺は、買い出しに行ったのだが、その時に事件が起きたのだ。

ドオオオオンッッッ

急になり響いた爆発音。
それはかなり大きく、爆発の見えていないここの地面が揺れた位だった。
その、直後――

銃撃戦が始まった。

今思えば、場所が場所だった。
ローマ法皇が住んでいるとされる建物の広場が見える位置にあるこの市場は、たまに

法皇自らも訪れていると言う。
そして、最近のローマの情勢。
ローマ法皇に対する不満が募って、何年か前にも一度、ローマ法皇が狙われる、という事件が起こっていた。

――そんな事はさっぱり忘れていた俺は、そのまま巻き込まれた。

ただし、買い物をしていた店の店主が庇ってくれて、店の中に匿ってくれたのだが、ほんの僅かに遅かった。

更に言うならば、俺の運もなかったと言えるだろう。

――何故なら、後で知った事だが、そこで銃撃を始めた反ローマ法皇側には、金で雇われた世界最悪のテロリストが参戦していたのだ。

そのテロリスト集団は、内戦などの戦闘地域に行き、無差別虐殺を内戦に紛れて繰り返すような連中だった。目的は明かされていないらしい。

そんな奴らが混じっていた訳で、

俺は、肩を撃たれ、次いで太ももを撃たれた。

――そんな事があり、現在はローマの病院のベッドで寝ているのだが、

現在の時刻は、あの日から三ヶ月も経っていた。

絶妙に入った銃弾の排除による出血などの手術を終えたのが二ヶ月くらい前らしいのだが、

その後も俺は寝続けていたらしい。

――そして、最近知った情報は、三ヶ月前の暴動のあと、ＬＥＶＥＬ５が四人と、ＬＥＶＥＬ４が二人以上と言う、とてつもない戦力が、ＬＥＶＥＬ０の指揮下で戦ったという、にわかには信じがたい事だった。